

けっしゅう  
「結集」

「結集」という言葉があります。「全国から若者が結集する」や「総力を結集する」といった使い方。辞書には「まとまり集まる事」、「多くのものを一つにまとめ集める事」とあります。

仏教では、お釈迦さまがお亡くなりになった<sup>のち</sup>後、その教えがバラバラになることをおそれて、弟子や修行僧の中から代表者を集めて教えを統一しようとする集まりが開かれました。これを、同じ「結集（けっしゅう）」と書いて「結集（けつじゅう）」と読みます。

第一回の「結集<sup>けつじゅう</sup>」は、お釈迦さま亡きあと教団を受け継いだ、マハーカッサパ（摩訶迦葉）をはじめとする五百人の弟子たちが集まり行われたとされています。お釈迦さまの教えを、さまざまな時さまざまな場所<sup>き</sup>で聞いた多くの弟子たちの記憶を頼りにすすめる会議で、議長役はお釈迦さまの身近に<sup>つか</sup>長年仕えていたアーナンダ（阿難陀）がつとめ、「私はこのように聞いた」という始まりでお釈迦さまの教え<sup>とな</sup>を唱え、それを直したり追加したり削ったりするという作業を経て一定の形式にまとめます。それを議長が<sup>いっせつごと</sup>一節毎に唱え、他の弟子も後から<sup>とな</sup>唱えて確認をし、最後に皆で一緒に唱える事で統一されました。これにより「お経」が成立したのです。

さらに、教団の一員として守らなくては<sup>きはん きそく</sup>いけない規範や規則について、<sup>かいりつ</sup>戒律に最も通じたウパーリ（優波離）が<sup>とな</sup>唱え、同じようにして確認されました。

初期の「結集<sup>けつじゅう</sup>」では、お経を文字で記録することをせず、記憶に基づいて、言い伝えられていきました。また、お釈迦さまは、<sup>たいきせつぼう</sup>対機説法<sup>おう</sup>と<sup>おう</sup>いって、相手に応じて教えを説いたとされますので、その教えをまとめるのは並大抵のことではなかったでしょう。

お釈迦さまの教えを何とか正しく残したいという弟子たち、そして、それに連なる後世の僧侶たちの想いにより、<sup>こんにち</sup>今日私<sup>こんにち</sup>たちは「お経」にふれ、学ぶことができるのです。

多くの弟子が集まり、お釈迦さまのたくさんの教えをまとめる「結集（けつじゅう）」。まさに現代の「結集（けっしゅう）」の意味である、「まとまり集まる事」、「多くのものを一つにまとめ集める事」の<sup>みなもと</sup>源<sup>みなもと</sup>といえるでしょう。